

『敗戦真相記』を読む/敗因-3「指導者の独善」

企業経営漫談士 岡野実空

我がラスト(50)スパートも残り13回。「軍事学/地政学」シリーズの5回目は、『敗戦真相記』にある太平洋戦争の重大な「敗因」の三つ目、「指導者(たち)の独善」がテーマ。今回はそれに陥る要因と防止対策から、私たちにふさわしいリーダーシップを考えます。

その1: 第三の敗因「指導者の独善」

「誤った目標」「慢心」に続き、永野氏が指摘する第三の敗因は「指導者の独善」。具体的には、「軍の指導者が国民の良識や感覚を無視して、一人よがりで自分のいいと信じたところに国民を連れていこうとした点」です。続いて氏は、「何が故に戦争をしなければならないのか、十分理解せしむることなくして、法律と権力でもって強引に押し切ろうとしたために、かえって国民の中に一種の反感的な気分が起こってきた」と述べ、その証となる現場の実態をいくつか述べます。

そして「結局、戦争に勝つためには、どうしても国民の総意を集める以外にはない。その点においては政治家の方がはるかに優れている」のに、日本の軍部は「国民の目を閉ざし、耳を塞ぎ、口を閉じさせ、ただ鞭と剣の力で、工場に戦場に追いやったのですから、最後まで本当の戦力が出なかった」と、第三の敗因を総括しています。

その2: 独善の「基因」

近代史の教訓の一つは、「軍人がやった戦争で勝った例はない。必ず政治家の率いている軍隊に敗けている」ですが、それは企業人が陥りがちな「独善」への警告でもあります。なぜなら我が国「企業戦士」の大半は、戦前の軍人の生き写しだからです。

陸軍の場合、地元しか知らない少年が14、5歳で幼年学校へ入り、士官学校を卒業し現場を体験してから大学校へ。その間ほとんど世間の風に当たらず、一般教養も身に付けないうまま、ひたすら習得するのは過去の「戦術」や「作戦」。しかもその後の配属や昇進が、その卒業成績で決まるとあっては、まともな指導者が育つはずありません。

また多少マシとはいえ、海軍も似たようなもの。日露戦争以降、ほとんど実戦経験のない貴族的エリートたちが、陸軍の活発な動きに刺激され、無謀な腕試しをしたくなるのも無理からぬところです。

参照 『三々な経営』

3-19～21 認知バイアス①～③

3-23 ふつうの人のための「既成概念」転換法

3-24 ふつうの人のための「企画力」強化法

参照「広告コピー」で考えるマネジメント

C-03 「賛成1、反対9。どちらも間違いじゃない。」

C-05 「意見が違う。だから話がオモシロイ」

その3: 「独善」に関する「教訓」

永野氏は、日中、独ソ、日米という3つの「思惑の違い」を挙げ、それが戦争を惹き起こした要因であったことを指摘しています。そこでは自らの「先入観」に加え、他人・他国も自分と同じように考えるという「思い込み」が齟齬を倍増したのです。

また本来は世界に冠たる混血民族という「多様性」を有しながら、逃げ場のない極東の島国に生活するがゆえに、それを抑制するべく発達した、私たちの「空気」による「同調圧力」。それは頭抜けたリーダーを排除する民族性も醸成し、いざというときの混乱を長引かせることになりました。

だからこそ、私たちが特に意識しなければならないのは、「群衆」が陥る「心理的なワナ」。それはフランスの社会心理学者ル・ボンの言うとおり、「個人でいるのとはまったく別の感じ方や考え方や行動をする」ものであり、「衝動的で、動揺しやすく、昂奮しやすく、暗示を受けやすく、物事を軽々しく信じる」こと。それを組織的に確認し、予め防止策を講じておかなければなりません。

そして太平洋戦争とは、それを防止すべき「指導者たち」まで「集団心理」に陥ってしまった究極の事例。その事実を多面的に考え、さまざまな議論をつづじて「教訓」を引き出し、共有しなかった結果が、バブル経済崩壊という「第二の敗戦」でした。

さらに「歴史」は繰り返し、「第三の敗戦」へ。

2022年10月17日 実空